

別 表

- 1 石神遺跡出土土器の器種分類（土師器）
- 2 石神遺跡出土土器の器種分類（須恵器）

〔解 説〕 石神遺跡等出土土器の器種分類

1. 平城宮土器分類と飛鳥分類

奈良文化財研究所における土器の分類網（以下、奈文研分類という）は、『平城報告Ⅱ』（1962年）において、初めてその分類記載法としての大要が示された。しかし『平城報告Ⅶ』（1976年）では、『平城報告Ⅳ』、『平城報告Ⅵ』を刊行するごとに、「それぞれ器種名を一部改変しており、各報告書間の記述に若干の不一致」が生じていることを受け、改めて器種名の統一を図っている。そこで基本的な分類網は『平城報告Ⅱ』に拠りつつも、器種名を統一した新分類を「平城分類」と呼ぼう。奈文研では以後、土器の分類記載にはこの平城分類を踏襲しており、飛鳥・藤原地区で出土する7世紀の土器に対しても、これを準用している。

しかし平城分類は、平城宮・京で出土する奈良時代の土器を分類記載するために考案された体系であるから、これを飛鳥・藤原地区で出土する土器に当てはめるときには、若干の修正が必要であった。例えば土師器杯G・Hは、7世紀から8世紀にかけての頻出器種である杯A～Cを除き、おもに飛鳥地域で出土する器形を指すために、平城分類の枠組に新たに付加された器種である。同様に須恵器杯G・Hも、飛鳥時代の間で消滅する器種を指すために追加された分類単位である。つまり飛鳥・藤原地区における7世紀の土器分類（以下、「飛鳥分類」）は、平城分類に最小限の修正をくわえて運用されてきたのである。

飛鳥・藤原地区で出土する7世紀の土器の分類は、現在のところ『藤原報告Ⅴ』（2017年）の別表2・3に示された器種分類が公式の分類体系である。しかし、これには既刊の刊行物に見える器種名が一部漏れており、あるいは一部で8世紀の土器を図示しているために、読者の混乱を招くおそれがある。そこで、以下ではこうした分類上の問題点を整理したうえで、とくに混乱が生じていた器種にかんして統一的で、かつ公式の名称を与えるものである。ただし、これは類型分類の構造に由来している問題を完全に解決するものではないので、飛鳥分類の見直しは今後も必要である。

2. 器種分類の修正・変更点

本書では石神遺跡出土土器の分類記載をおこなうため、別表1・2のとおり土師器・須恵器の器種名を統一する。各器種の特徴等は別表で解説し、おもに石神遺跡出土の実例を実測図で示した。また、適当な実例を欠く器種は、飛鳥池遺跡や藤原宮下層SD1901A、藤原宮東面内濠SD2300や、藤原京左京六条三坊等の出土土器で補った。以下、『藤原報告Ⅴ』や『飛鳥池報告』本文編〔Ⅱ〕との変更点を下記で詳しく述べる。

土師器杯D 『飛鳥池報告』には見えるが、『藤原報告Ⅴ』別表2に登載がないもの。平底で、内弯気味に立ち上がる口縁部の端部が丸く肥厚する供膳具である。一段暗文を施したものと、無暗文との2種類がある。本書ではSD347・640出土例2点を杯Dとして分類記載する。

土師器杯J 『藤原報告Ⅱ』（1978年）によれば、土師器杯Gは本来「内面と口縁部外面をヨコナデしただけの簡素なつくりの杯であるが、赤褐色系の色調をもつ杯A・B・C類とは胎土・色調を異にし、金雲母を含む茶褐色の胎土・色調をもつ」粗製杯（同書51頁）を指していた。しかし『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』（1987年）では、丸底の粗製杯を指す杯Ga・Gb・Gc類を付加したことで、土師器杯Gの概念が多様で曖昧となった。本書では、これらを相互に区別し、適切に分類記載するため、『藤原報告Ⅱ』で杯Gと呼んだ一群を「杯J」と呼び替えた。

土師器杯 J は口径11.0～13.0cmの平底食器で、底部外面を不調整にとどめ、その色調はにぶい黄色（Hue 2.5Y 6/3等）を典型とする。完形品の場合、ヨコナデは例外なく左回りである。これらは石神遺跡だけでなく、藤原宮下層SD1901A、藤原京先行条坊東一坊大路西側溝SD8551、藤原宮SE1105、同SK8471、同SD384・SX385などでも出土しており、飛鳥Ⅳ・Ⅴの土器群に伴出する。なお、杯 J と胎土・色調を同じくする土師器甕もあるが、本書ではその特徴を述べるにとどめた。

土師器盤 A 『藤原報告Ⅴ』別表2には「大型鉢」という器種が見えるが、本書では土師器盤 A とする。口径30～35cmで把手をもたず、無台で鉢が開いたこの器種は、既刊報告では盤ないしは盤 A と呼んだ事例が多いからである。

須恵器杯 J 『山田寺報告』（2002年）に見える器種名であるが、『藤原報告Ⅴ』別表3に登載されていないもの。口径10.0cm前後で、口縁端部が外反するものを指す。飛鳥Ⅰ・Ⅱの土器群に含まれる。本書ではSD335・435、SE800井戸枠内、SD365出土例を杯 J として分類記載する。

須恵器杯蓋 これまでの奈文研分類では、須恵器の杯蓋は一概に「杯 B 蓋」に分類されることが多かった。しかし、飛鳥Ⅳ・Ⅴの須恵器にかんしていえば、杯 A（無台杯）や椀 A（無台椀）も有蓋食器であったことが計量的にあきらかである。このため、「杯 B 蓋」の中には、潜在的に椀 A 等の蓋が含まれている可能性が高い。そこで本書では、杯身の口径や、杯蓋の受部径の度数分布をよく考慮したうえで、両者の対応関係を次のように整理する。

外端径12.0cm未満・かえり付・・・・・・・・・・杯 G 蓋
外端径12.0～13.0cm・かえり付・・・・・・・・・・杯 A 蓋
外端径14.0～15.0cm・かえりなし（推定尾張産）・・・・椀 A 蓋（推定尾張産）
外端径14.0～16.0cm・かえり付・・・・・・・・・・杯 A 蓋／杯 B 蓋
外端径16.0～19.0cm・かえり付（推定尾張産）・・・・杯 B 蓋／椀 A ・椀 B 蓋（推定尾張産）

上記の対応関係は石神遺跡出土須恵器の計量的な分析に基づく目安であって、一定の例外を含んでいると考えられる。今後、計測値が増えるごとに見直しをおこなう必要がある。

須恵器壺・瓶類 『平城報告Ⅶ』等で示された平城宮・京出土土器の分類では、須恵器の壺・瓶類は壺 A、壺 B、壺 E、壺 G、壺 H、壺 K、壺 L、壺 M、壺 Qなどと細分され、それぞれが固有の器形を指しているが、飛鳥地域で出土する壺・瓶類に適用するのが難しい。これは7世紀における須恵器壺・瓶類の器形が多様で、用途ごとに定型化していないためである。そこで本書では、壺 A・壺 B・・・・という器種名は部分的に用いるにとどめ、多くを**短頸壺・細頸壺・広口壺**などと呼ぶこととした。『藤原報告Ⅴ』の別表3とは、この点が異なる。また、算盤玉形の体部に喇叭形の頸部を付した須恵器壺（壺 K）は、短頸壺・広口壺という汎称にあわせて、本書では**長頸壺**と称する場合がある。平瓶、横瓶や提瓶は、考古学上の符牒としてこれを踏襲する。要するに、7世紀半ばまでの須恵器壺類を指すときに、壺 A・壺 B・・・・は用いないこととし、そのように呼ぶのは飛鳥Ⅳ以降の事例に限定した。

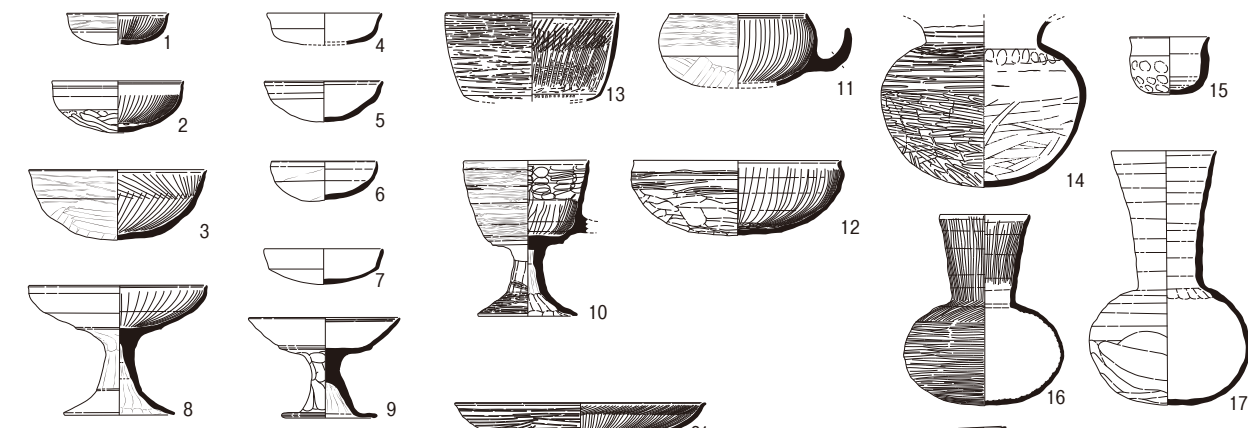
須恵器甕類 須恵器甕 A と甕 B とのちがいは、刊行物によってまちまちである。両者の識別点は口縁部の形態にあるといい、『藤原報告Ⅴ』別表3では口縁部が外反するものが甕 A、内弯気味のものが甕 B であるとしたが、この両者は既往の刊行物でも不統一が著しい器種となっている。こうした状況に鑑み、本書では甕 A・B を明確に区別せず、口縁部形状を少し具体的に説明するにとどめた。

なお、別表1・2に示した器種分類案は、『石神遺跡発掘調査報告』Ⅱなどにも継承できるよう、本書には載せない土器も採録している。今後は適宜改訂を施しつつ、長く活用されることを望んでいる。

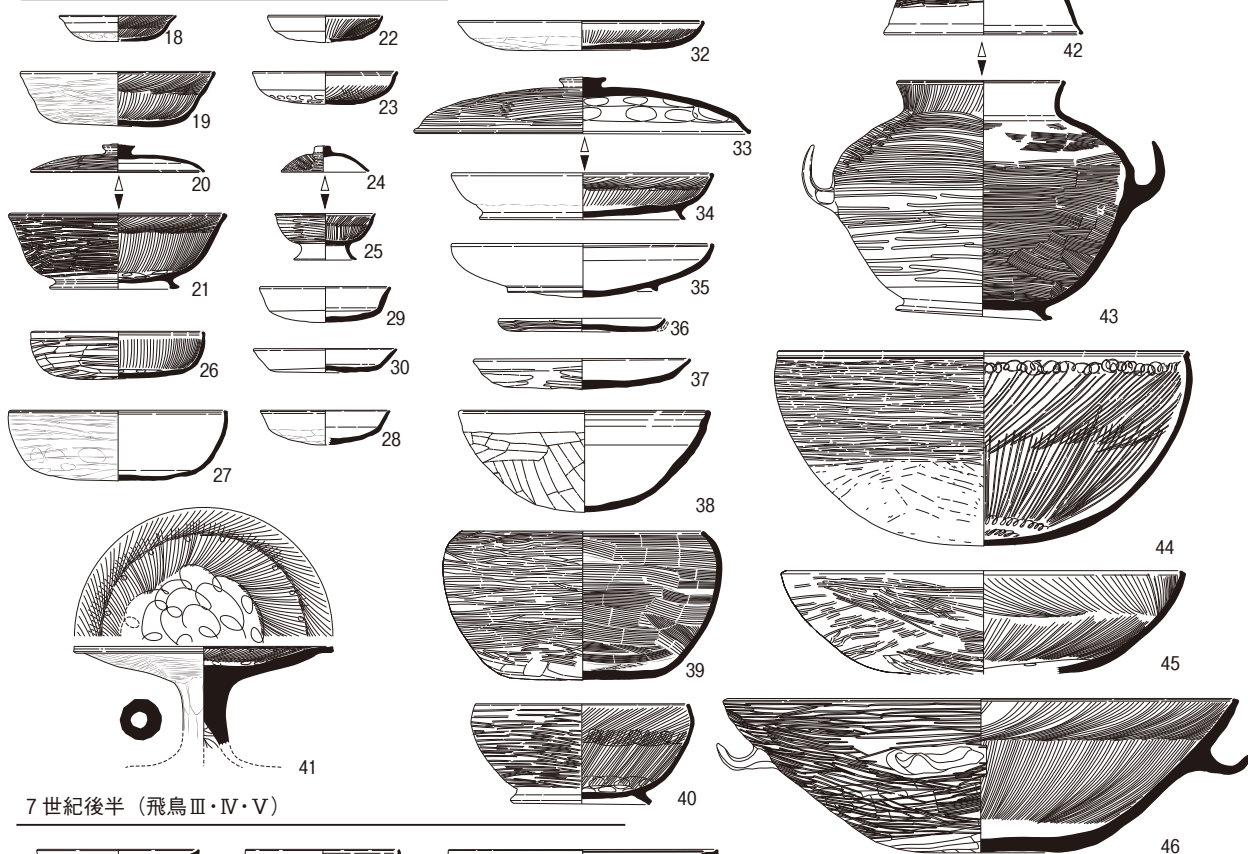
別表1 石神遺跡出土土器の器種分類（土師器）

器種名／規格	番号	標準例（付図掲載資料）	定義／分類記載上の特徴	既刊の器種名（表記揺れ）		
杯 A	古相 13	甘樫丘東麓SX037	④ Fig.71-19	広く平坦な底部から口縁部が斜め上にひらく碗形の供膳具。端部が内側に巻き込むものや、丸くおさめるものがある。外面にヘラミガキし、内面に二段放射暗文を施した個体が多い。口径16～18cmの杯AⅠと、10～12cmの杯AⅢとがあるが、杯AⅡは少ない。飛鳥Ⅰ・Ⅱに古相の例（13）があるが、定型化したものが増えるのは飛鳥Ⅲ以降である。		
	I 19	SD640	本書			
	Ⅲ 18	SD640	本書			
杯 B	蓋 20・24	灰褐色土・大官大寺下層SK121	本書・⑦ 図44-1	杯AⅠに高台を付した供膳具で、内面に二段放射暗文を施した個体が多い。その蓋は笠形の頂部につまみを付し、外面にヘラミガキを施すのを通則とする。これらとは別に、小口径の杯身・杯蓋で一具をなす例（24・25）もある。		
	身 21・25	SE800石敷埋土・大官大寺下層SK121	本書・⑦ 図44-6			
杯 C（深形）	I 3	SE800	本書	丸底に近い底部から口縁部が内弯気味に立ち上がる碗形の供膳具で、鈍（かなまり）のかたちを写したもの。口縁端部に内傾する面をもつものが多い。口径16～18cmの杯CⅠ、12～13cmの杯CⅡ、10cm前後の杯CⅢがある。杯CⅠの径高指数は30～40（飛鳥Ⅰ・Ⅱ）。内面には一段放射暗文を施すが、飛鳥Ⅰには二段放射暗文を施した例（3）もある。		
	Ⅱ 2	SD335	本書			
	Ⅲ 1	SD335	本書			
杯 C（浅形）	22・23	SD347・640	本書	深形の一群とは異なり、低平で浅手の杯C。径高指数は20～30（飛鳥Ⅳ・Ⅴ）。内面に一段放射暗文を施し、底部外面を不調整にとどめる例が多い。飛鳥Ⅳ以降。		
杯 D	26・27	SD640	本書	内弯気味の口縁端部が内側に肥厚する平底の土器で、外面をヘラミガキで整えるもの。一段暗文を施すものが多いが、無暗文で器形を同じくする個体もこれに含める。（鉢B） ⑩ Fig.55		
杯 E・杯 F	36	褐色土（第4次）	本書	広い底部から口縁部が内弯気味に立ち上がる皿形の供膳具。把手を付した杯E（36）と、高台を付した杯Fがある。		
杯 G	a 4		③ 第10図39～42	—	端部を小さく外反させた直立気味の口縁で、金雲母を含む細かい砂質土で茶褐色を呈する。	
	b 5	SD435	本書	（碗） ① PL.54-8～10		杯Cに似た比較的精良な赤褐色の胎土で、口縁端部も杯Cに似て小さな面を内側につくる。
	c 6	SD500	本書	—		口縁端部外側に面をつくり内弯する。淡褐色で砂を含む。
杯 H	7・28	SD435・SD640	本書	（杯E）	口縁部を強くヨコナデし、底部を粗いヘラケズリで調整する粗製の杯。口縁部と底部との境に稜をなす。	
杯 J	29・30	SD640	本書	（杯G） ① PL.54-11～13 （杯D） ② PL.86-13	内面と口縁部外面をヨコナデで整形し、底部を不調整にとどめる平底の杯。にぶい黄色を呈し、胎土には金雲母を含む。かつて「杯G」（文献①）と呼ばれた一群で、杯（29）と皿形のもの（30）とがある。	
皿 A	31・32	水落遺跡貼石周辺・SD640	⑥		広く平坦な底部から短い口縁部が立ち上がる浅形の供膳具。底部が丸みを帯びるもの（31：飛鳥Ⅱ・Ⅲ）から、平坦なもの（32：飛鳥Ⅳ・Ⅴ）へと遷移する。	
皿 B	蓋 33	灰褐色土（第3次）	本書	皿Aに高台を付したもので、皿Aよりも大口径の個体を含む。笠形の頂部に扁平なつまみを付した大型の蓋（33）が被さる。		
身 34・35	SD640	本書				
皿 H	37	藤原宮SE1105	①		底部を粗いヘラケズリで調整する粗製の皿で、胎土・色調は杯Hに同じ。	
高杯 A	41	藤原宮SD2300	⑧		広く平坦な皿状の杯部に脚柱を付した器形。脚柱は周囲を縦方向のヘラケズリで面取りする。杯部内面に放射暗文と螺旋暗文を施す。飛鳥Ⅳに出現し、奈良時代に盛行。古器名の「土高盤」。	
高杯 C	8	SD335	本書	高杯 B ① PL.60-103	杯Cに似た背部に、断面円形の脚柱を付したもの。口縁部内面に一段放射暗文を施す。胎土・色調は杯Cに同じ。	
高杯 G	9	SD500	本書		杯Gb類に共通する胎土・色調の高杯で、無暗文のもの。	
盤 A	45・46	左京六条三坊SD4135	⑨	（大型鉢） ⑨ 別表2-24（SD1901A） ＊原報告では「盤」	平坦な底部から口縁部が斜め上に大きくひらく器形で、無台のもの。内面に放射暗文を、外面にヘラミガキを施す。飛鳥Ⅳ・Ⅴでは口径30～40cm前後の個体が多い。一对の把手を付したものもある。	
盤 B					盤Aに高台を付したもの（本書では掲出資料なし）。	
大型鉢	44	甘樫丘東麓SX037	④		丸底で口縁部が内弯する大口径の鉢で、内面に二段放射暗文を施すもの。	
鉢 A	39	SD1476（8・9次）	本書		平坦な底部から口縁部が内弯気味に立ち上がる深手の鉢で、口縁端部を丸くおさめる。内面に二段放射暗文を施す個体や、横方向のハケ目を施す個体がある。	
鉢 B	12	SE800	本書		狭く平坦な底部から口縁部が内弯気味に立ち上がる浅手の鉢で、口縁端部が短く外反する。内面に一段放射暗文を施す個体や、横方向のハケ目を施す個体がある。	
鉢 C	40	藤原宮SD3206	⑤		鉢Bに高台を付したもの。	
鉢 H	38	SE800石敷埋土	本書		杯Hと同様の器形と調整で、直立気味の口縁部をもつ鉢。胎土も杯Hに同じ。	
把手付碗	11	SD335	本書		口縁部が強く内弯する碗の中位に角形の把手を付したものの。内面に一段暗文を施す個体がある。	
脚付碗	10	SE800	本書		狭く平坦な底部からやや長く直線的な口縁部を付すコップ形の碗に、喇叭形の脚柱を備える。角状の把手を1本付し、外面にヘラミガキ、内面に暗文を施す。	
壺 A・同蓋	42・43	SK648	本書		肩の張った球形の胴部に短く直立する口縁部を付した有台・広口の壺。いわゆる業密形。胴部から頸部にかけてヘラミガキを施す。胴部中位に一对の把手を付した個体が多い。その蓋は頂部に鉋形のつまみを付しており、頂部外面に4分割のヘラミガキを施すのを通則とする。杯Aの底部外面につまみを付して壺Aの蓋とした例もある。	
壺 B	15	SD640	本書		小さな底部といびつな球形の胴部とからなり、短く外反する口縁部をもつ広口の小壺。胴部は手捏ねで成形し、外面は不調整のままとする。	
短頸壺	14	SE800	本書		扁球形の胴部に、外反する短い口縁部を付した無台・広口の壺。	
長頸壺	16・17	SE800	本書		扁球形の胴部に、やや外方へとひらく長い頸部を付した無台の壺。胴部から頸部にかけての外面をヘラミガキで整えた個体（15）がある。	
甕 A	47・48	SE650・SE800	本書		球形の胴部と、短く外反する口縁部とからなる広口の煮炊具。頸部以下の容量が2～4ℓまでの個体が多い。胎土や器面調整（ハケ・ヘラケズリ）の組み合わせ等により、複数群を識別できる。古代の塙（なべ）に当たる。	
甕 B	49	甘樫丘東麓SX037・SE800	④・本書		球形の胴部中位に一对の把手を付した広口の煮炊具。頸部以下の容量が4ℓを超える個体が多い。大容量の個体は古代の甕（ほとぎ）にあたる可能性がある。	
甕 C	51・52	SK518・SE650	本書		半球形の底部と長い胴部とからなり、短い口縁部が外方へとひらく背高の煮炊具。いわゆる長胴甕。器面調整（ハケ・ヘラケズリ）の組み合わせ等により、複数群を識別できる。	
鍋	50	灰褐色土（第3次）	本書		半球形の胴部から外方へと大きくひらく口縁部とからなる広口の煮炊具。把手を付したものを鍋Bと呼び、これをもたない鍋Aと区別する場合がある。	
甌	53	SX795	本書		胴部がややひらき気味の円筒形をなす煮炊具で、底部に複数の蒸気孔を開けたものと、筒抜けのものがある。胴部中央に一对の角形把手を付している。	
甗	54	藤原宮SD145	未報告		截頭砲弾形の片側を大きく切開して焚口（火口）とし、胴部上端に掛口を開けた移動式のかまど。焚口の周縁には庇を付している。側面に手がかりの孔を開けたものがある。韓甗。	

①『藤原報告Ⅱ』（1978）、②『藤原報告Ⅲ』（1980）、③『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』（1987）、④『藤原概報25』（1995）、⑤『奈文研年報1997-Ⅱ』、⑥『藤原報告Ⅳ』（1995）、⑦『紀要2001』、⑧『紀要2012』、⑨『藤原報告Ⅴ』（2017）、⑩『紀要2018』



7世紀前半・中頃（飛鳥Ⅰ・Ⅱ）



7世紀後半（飛鳥Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ）



別表2 石神遺跡出土土器の器種分類（須恵器）

器種名／規格		番号	標準例（付図掲載資料）	定義／分類記載上の特徴		既刊の器種名（表記揺れ）
杯A		11～13・20	SD640	本書	口縁部が外方へとひらく平底の無台杯。口径13.0cm前後のものと、15.0～18.0cmのものがある。	
杯B		21・24	SD640	本書	口縁部が外方へと開く平底の有台杯で、輪状の高台をめぐらせたもの。口径13.0cm前後のものと、15.0～18.0cmのものがある。	
椀A		18・19	SD640	本書	平坦な底部から口縁部が直立する無台の供膳具で、杯Aより背高で深手のもの。径高指数は40～50。口径14.0cm前後・器高5.0～7.0cmの個体（尾張産）が多い。その蓋（15）は平坦な頂部に丸い宝珠形のつまみを付したもので、かえりをもたない。	
椀B		26・27	SD640	本書	平坦な底部から立ち上がる口縁部がやや外方へとひらく有台の供膳具で、杯Bよりも背高で深手のもの。	
椀C		25	SD640	本書	やや丸みを帯びた平坦な底部から内弯気味の口縁部が立ち上がる無台の供膳具で、鏡形のもの。口径18.0cm前後で尾張産のものを典型とする。	
杯蓋（かえり付）		16	SD640	本書	等形の頂部中央に宝珠形やボタン形のつまみを付した蓋で、内面の外縁寄りにかえりを付して身受けの溝をめぐらせたもの。杯類の口径に対応し、外端径は10.0～18.0cmのレンジに収まる。	
杯蓋（かえりなし）		15・17	SD640	本書	等形の頂部中央に宝珠形やボタン形のつまみを付した蓋で、内面の外縁を折り曲げて身受けとしたもの。尾張産で13.0～15.0cmのものは無台椀（椀A）の蓋に、18.0cmを超えるものは杯Bや椀A等の蓋に当たる。尾張産以外で14.0～18.0cmの個体は杯Bの蓋である。	
杯G	蓋	4	SD435	本書	小さく平坦な底部と、ほぼ直立する口縁部とからなる、無台・有蓋の小型杯。受部径が10cm前後で、乳頭状または宝珠形のつまみを付したものは、杯Gの蓋として認識されることが多い。	
	身	5	SD435			
杯H	蓋	1	SD435	本書	丸底の底部からやや外反した「受部」へとつながり、受部の付け根から短い口縁部が立ち上がる器形。古墳時代以来の伝統的器種で、杯身（2）と杯蓋（1）とで一具をなす。	
	身	2	SD435			
杯J		3	SE800	本書	小さく平坦な底部と、内弯気味の口縁部とからなり、口縁端部が外反する小型杯。飛鳥Ⅰ・Ⅱの土器群に少数がともなう。杯Gの変種とみられる。一部に近江産を含む。	
皿A		22・28	SD640・SK641	本書	広く平坦な底部から短い口縁部が立ち上がる浅形の供膳具で、無台のもの。	
皿B	蓋	29	灰褐色土（第3次）	本書	皿Aに高台を付した浅形・有蓋の供膳具で、大口径の個体が多い。	
	身	30	SD640			
短脚高杯		6・7・14	甘樫丘東麓遺跡SX037	③	小さく平らな底部から口縁部がほぼ直立して立ち上がる小型の杯部に、ラッパ形にひらく短い脚柱を付したもの。かえり付の小型蓋と一具をなす例（6・7）あり。	高杯G・H ⑩ Fig.69
長脚高杯		9	甘樫丘東麓遺跡SX037	③	口縁部下半に1～2条の稜線をめぐらせた杯部に、二段透孔を開いた長い脚柱を付したもの。	
高杯A		23	石神遺跡（第11次）	⑧	浅い皿状を呈する杯部に喇叭状の脚柱を付したもの。	
盤A		31	SD500	本書	広く平坦な底部から、短い口縁部が斜め上にひらく鉢形ないしは盥形の大口径器種で、無台のもの。浅鉢形（31）と深鉢形（32）のほか、大口径の盥形（35）がある。飛鳥Ⅳ・Ⅴでは口径40～50cmの個体が多い。鉢形や角形の把手を付したものもある。陶手洗または洗盤に当たるか。	
		32	石神SK1245（第7次）	⑨		
		35	飛鳥池遺跡SK1128	⑩		
鉢A		36	SD640（第3次）	本書	ごく狭く平坦な底部から、強く内弯する口縁部が立ち上がる半球形の鉢。いわゆる鉄鉢形。	
鉢E		39	褐色土（第4次）	本書	平坦な底部から直線的な口縁部が立ち上がるバケツ形の器形。	
鉢F		37	藤原京東一坊大路SD5110	②	厚い円盤状の底部から、長く直線的な口縁部が外方へと立ち上がる背高の器形で、古代の陶臼に当たる。底部下面に多数の穿孔を施す個体がある。飛鳥・藤原地域では、須恵器のほかにも瓦質のもの（38）が少数出土している。	
		38	藤原京右京一条一坊SB8670	④		
台付大型鉢		33・34	石神遺跡（第17次）	⑥	口径35cm前後で、底部に台脚を付した鉢形容器（34）。台脚には透孔を開けている。ドーム形的大型蓋（33）と一具をなす。	
甕		10	飛鳥池遺跡灰緑色粘砂	⑩	球形ないしは算盤玉形の胴部に、外方へとひらく長い頸部を付した壺形の器形。胴部中央の1ヵ所に孔をあける。口径は胴径を上回る。	
壺蓋		40	SE800	本書	壺類（短頸壺や平瓶など）の蓋で、つまみを付し、かえりをもつもの。	
		47	大官大寺下層SK121	⑤	壺類（短頸壺や平瓶など）の蓋で、碗形で口縁端部を内側に小さく折り曲げるもの。	
短頸壺		41	SE800	本書	蕉形の胴部に外反する短い口縁部を付した無台の壺で、本表と平城宮土器分類の壺A（いわゆる薬壺形）とは異なる器形を指す。かえり付の蓋が付属するとみられる。	「壺A」 ⑦ 別表2
長頸壺		48	飛鳥池遺跡SD1173	⑩	肩が「く」の字形に張り出す胴部に、外方へとひらく長い頸部を付した壺。透孔を開けた台脚を付し、胴部側面に列点文をめぐらせる個体がある。平城宮土器分類の壺Kに通じる器種。	
広口壺		42・46	SE650	本書	肩が「く」の字形に張り出す胴部に外方へとひらく口縁部を付した無台の壺で、徒前の壺Bとは異なる器形を指す。	「壺B」 ⑦ 別表2
直口壺		8	SD500	本書	球形の胴部に長く喇叭形の頸部を付した壺。頸部の高さは全高の50％前後を占める。7世紀前半から半ばまでの該当器種を指す。	
壺A・同蓋		49・50	SD640	本書	肩の張った球形の胴部に短く直立する口縁部を付した有台・広口の有蓋壺。いわゆる薬壺形。専用の蓋はボタン形のつまみを付した平坦な頂部と、直角に折れ曲がる口縁部とからなる。7世紀半ばまでの短頸壺とは区別する。	
壺B		51	SD640（第5次）	①	平坦な底部から長い胴部が立ち上がり、肩部を強く屈曲させて短く直立する口縁部を付した背高で広口の有蓋壺。肩部に1～2対の把手を付した個体がある。底部に「瓮五十戸」と刻書した例など、尾張産が目立つ。	
壺C		43・44	SE800・SD640	本書	算盤形の胴部に短い口縁部を付した、広口で無台の小型壺。	
細頸瓶		45	飛鳥池遺跡SD1110	⑩	扁球形の胴部に細く長い頸部を付した無台の瓶。	
平瓶		52・53	SE650・SE800	本書	扁球形ないしは逆台形に成形した胴部をいちど閉塞し、器軸から外れた部分に開口して頸部を付した器形を指す。	
横瓶		54	SE650	本書	俵形に成形した胴部をいちど閉塞し、側面に開口して外方へとひらく頸部を付した器形。	
提瓶		55	SE650	本書	扁球形に成形した胴部をいちど閉塞し、器軸から外れた部分に開口して頸部を付した器形。肩部に環状あるいは角状の把手を付した例あり。	
甕		56～59	SE800・SK518・SD640	本書	母形の胴部に広口の口縁部を付した大型の貯蔵具。胴部外面はタタキ目またはカキ目に覆われ、内面に当て具痕を残す例が多いが、当て具痕を摺り消した個体もある。	

①『藤原概報16』（1986）、②『藤原京左京二条一坊・同二条二坊発掘調査報告』（1987）、③『藤原概報25』（1995）、④『藤原京右京一条一坊発掘調査報告』（1997）、⑤『紀要2001』、⑥『紀要2005』、⑦『藤原報告Ⅴ』（2017）、⑧『紀要2018』、⑨『紀要2019』、⑩『飛鳥池報告』本文編【Ⅱ】（2022）

